いの流水俳壇

松尾　満津於 選

「当季雑詠」

身を隠すときも灯してゐる蛍　岡本とも子

（評）蛍のあの生臭い異様な匂いから素早く感じとった連想は見事。蛍は体は小さく黒色、尾に発光器があり、夜青白い光を放つ、その匂いと蛍の曳く光りと照応して闇が動く、外敵から身を守るときも発光体の全部は消えない、この句はその実体をそのまま描写している。

掬はれて夜店の金魚鯉となる　植田　紀子

（評）金魚は夏季観賞用にされるために夜店等の、人気商品である、人工的にいろいろな新品種を作り出すに至った。縁日等の路傍には掬い捕りをやらせる金魚売りが店を張る、夜店で掬はれ、喜々として家に帰ってよくみると、それは金魚ではなく鯉だったというのである。思惑は違ったが格別腹立たしくもない、矢張り鯉だったか？…見分けは、やっぱり真昼に限る、とは…後悔とまでは云はれなくても反省の気持ち…。

梅干すや行きし戻りの皆が喰う　竹崎　光子

（評）数日塩漬けした梅を一と先づ陽に曝し紫蘇を加えて漬けなほし、更にこれを筵（むしろ）、戸板、蚕薄（えびら）等の上に広げて干すが、そのときの情景を句にしたものである。通り掛かりの気さくな近所の人、親戚、知人等ちょっと撮（つま）んで漬かり塩梅（あんばい）をこころみる…「アッ上手によう漬かっちゅう、ボッチリの味じゃ…」一人、またひとり、梅の数はだんだん減るが、そこは田舎の気の知れた者同志細かい詮索はさらさらないのである。

物こぼす齢（よわい）となりぬ五月闇　津田　久美

（評）「五月闇」は五月の雨の日の暗さを言う、この頃の夜は、あやめも分からぬまでに漆黒の闇、同時に昼間の暗さをもいふ、「物こぼす齢」とは何歳ぐらいの人を指すのだろう。人生は必ずしも年数だけで老けるものではなく、心の持ち方で若くもなり老けもする。作者はまだ若く、物こぼす年齢の翳（かげ）も見せぬ女（ひと）だと思うが明るいひかりのなかに自分自身の確かな道を力強く歩んでほしいものだ。

足取りの清がしナースの白い靴　刈谷　志津
待つと言う時間の長し初蛍　片岡　包女
自画像の瑞山の軸夏座敷　友草　水月
空蟬となりても眼光りをり　間　浩太
顔見えぬ胸ときめきの日傘かな　森岡　照月
蚊帳を吊る四隅に残る二寸釘　井上　郁子
どくだみの白き十字架暮れ残る　大川　節弥
端居して真向いに見る赤い月　川村　博子
残照の古里に影おく鬼ヤンマ　筒井　正子
雷やふと想い出す亡父の声　竹崎たかひろ
うら年やかぞえるほどの梅をつけ　弘瀬うき子
児を抱きし日々の思い出蛍の夜　伊藤　萩甫
早朝の市場賑わう初鰹　松尾満津於

次　題　「当季雑詠」
締め切り　毎月第2月曜日

投句先
吾北教育事務所　上八川甲2010
☎867―2133

花火はね　夜空にうかぶ　花なんだ
川内小4年　野口　朱莉
みんなはね　先生いると　静かだよ
川内小4年　大久保朋美
あじさいの　上に乗ってる　かたつむり
下八川小4年　曽我　遥
さかあがり　いつになったら　できるかな
伊野小5年　森木　なゆ
川内を　転校しても　忘れない
川内小4年　宮崎菜乃羽
今日もまた　何かいいこと　ありそうな
川内小2年　宮脇　佳凛
おかあさん　どうしていつも　おこるのか？
川内小3年　古谷きらり
夏の虫　みんなきれいな　声がする
下八川小2年　森下　彩音
新緑が　緑のカーテン　きれいだな
伊野小6年　鍋島すず香
冬の夜　空の星座は　きれいだな
伊野小4年　和田　愛美

※「こども川柳」は町内全小学校の児童の皆さんを対象に募集しています。今回は4小学校から292句の応募がありました。ありがとうございました。
※次回提出締め切りは9月20日です。たくさんの皆さんの応募をお待ちしています。（応募は各小学校を通じてお願いします。）